

て斯邦の風といふ病はなほるなり、

〔本朝醫談〕夏月、ねびえといふ病、唐土になし、故に治法をいへる醫書なしと聞けり、強ていはいふ、唐

病靜而得之の證なるべし、醫方聚要、一溪曰、紫蘇葛根羌活解表、厚朴蒼朮藿香散寒、內傷生冷加乾姜縮砂之類

〔時還讀我書上〕甲申七〇文政三月、麻疹ヤ、止ントスル頃ヨリ、時氣盛ニ行レ、一家少長トナク皆床

ニ臥ニイタル、其證一應ノ感冒ヨリ熱氣強ク、初起ヨリ少陽ヲ兼ルモノ多シ、一二日ノ間ハ煩熱

シ、胸脇ヨリ周身マデ疼痛セリ、輕ハ七八日、重ハ十數日、柴胡種類ニテ清涼シテ全治セリ、此亦先

ダツテ浪華ニ行ル、コト傳聞セシニ、間モナク都下ニモ及セリ、辛巳四〇文政ノ春ノ疫ト相似テ

稍重カリシ、
〔醫學天正記乾上〕傷風。

慶長七年正月朔日

一 德安内七十餘 傷風寒熱戰慄、頭痛嘔吐有汗、脈浮緩、解肌湯 桂枝湯ニ加陳半、寒熱退、冷

汗眩暈、大便瀉難持、加蒼朮參

〔醫學天正記坤〕傷風

一 傷風寒熱戰慄、頭痛嘔吐有汗、脈浮緩、桂枝湯加貴守、寒熱退、冷汗出、眩暈、大便瀉、加參芪木、

〔醫學天正記乾上〕瘧疾。

一 陽光院殿御年近 瘧疾三發、二日ニ一發、召予、依殿下之命、在大坂備前宰相公御内儀煩依テ也、故

半井通仙軒御藥進上、服藥之後、又三發、發日之朝、通仙截藥ヲ進上、色散藥也、服藥之後、半時許而

心中惕々而精神如醉、一身班紋出、吐血數碗、而經二時許、而忽薨玉フ、通仙色ヲ變ジテ、山科藥ハ

誰モ所持ナキヤト云、傍ノ人ノ曰、サテハ今朝ノ截藥砒霜ノ入タルナルベシ、摠別半井ノ家ニ

瘧ノ截藥ノ秘傳ニ、砒霜ノ入タル丸藥アリ、是ハ粉藥也、丸藥無之故、俄ニ粉藥進上シテ如此、半